Goshin Moro
Supporters Club News Letter

08

茂呂剛伸後援会 会報

2018/11

北海道150年ウィークの幕開けを飾る

100人縄文太鼓パフォーマンス、大成功!!

「北海道」という名がこの地に生まれて150年。今年はその関連行事が数多く行われていますが、その一環として7月14日から開催された「北海道150年ウィーク」のオープニングイベントで、北海道庁赤れんが庁舎の前庭で、100人の縄文太鼓奏者によるパフォーマンス『祝鹿-SHUKUGA-』を披露しました。本作はエゾシカをモチーフにした仮面を被り縄文太鼓を演奏するライブパフォーマンス作品です。

エゾシカはヒグマ、キタキツネと並び私たち"どさんこ"にとって身近な存在です。縄文時代の人々にとっても、それは同じだったことでしょう。

北海道の自然を象徴する彼らの姿を仮面(ビジュアル)と縄文太鼓(サウンド)で表現した『祝鹿』。様々な世代の100人での演奏風景は、エキゾチックな雰囲気と可愛らしさが入り混じったインパクトあるものとなり、北海道の命名150周年を記念するとともに、次の時代の幕開けを祝うプロローグとなりました。

「縄文精神」を、これからの人類の未来を照らす北海道、日本の宝として、これからも大切に発信してまいります。

インタビュー vol.8

シリーズ『縄文と観光』

「北の縄文」を掘り起こす

阿部千春さん
北海道 縄文世界遺産推進室
特別研究員

茂呂剛伸

司会・撮影・構成　ウリュウ ユウキ

“気がついた人間が発信していく”という責任

・・・阿部さんは北海道・北東北の広域に亘る縄文遺跡群の世界文化遺産登録を目指す中、現場の最前線にいらっしゃいますが、縄文に携わる、心を惹かれるきっかけとなったものは何でしょうか。そして、足元で見つけてきたことと広域の視点で見えてきたことから”北の縄文”が持つ意味や役割をどのように考えておられますか。

阿部千春さん　私は大学から考古学をやっていて、1983年(昭和58年)に北海道埋蔵文化財センターに入り、初めて北海道の縄文遺跡を発掘しました。千歳市の美々４遺跡という周堤墓のある遺跡です。それまで縄文は原始的で野蛮だというイメージが私の中にもあって、あまり重要とは思っていなかったのです。だけど、これだけ大規模な墓のシステムを作っているのは社会構造が相当複雑な証拠で、そこでイメージがガラッと変わったわけです。その後、南茅部という小さな漁業の町(現・函館市)に赴任して川汲(かっくみ)遺跡を掘ったのですが、住居にある炉の後ろに小さな土坑があって、底の黒っぽい土を分析したら胎盤の脂肪酸が出て、お産したときの後産を埋めたということがわかりました。日本には後産を土間に埋め、踏むことで子どもが丈夫に育つという風習があって、命を非常に大切にしていたわけですが、縄文文化にも共通の精神性があることに気づき、そこから少しずつ関心を持つようになりました。

次に、大船遺跡という大規模な集落を発掘することになって、そこに「盛土遺構」というごみ捨て場のようなものがあり、大量の土器・石器が堆積していました。ちなみに、貝塚は動物や魚の骨が堆積した場所でゴミ捨て場と考えられていましたが、人の墓もあるので単なるごみ捨て場ではなく、命に感謝してその魂を送るような儀式をしていた場所と考えられるようになってきました。盛土遺構も同じで、縄文人は、人間や動・植物だけでなく、道具類など全てのものに命が宿っていると考え、その役割を終えたときに感謝の儀式をしていたのでしょう。

それから、子どもの足形が付いた小判形の粘土板が垣ノ島遺跡のお墓から17点出てきました。最初は「立ち祝い」や「百日祝い」のように子どもの成長を祝ったものと思いましたが、そうすると足の大きさはほとんど同じになるはずです。しかし、土板の足形はバラバラで亡くなった年齢に違いがあることを示しているし、出土したのは大人の墓からです。おそらく、子どもが亡くなった時に足形を遺し、親が亡くなった時に粘土板と一緒に埋葬したのかなと推測しています。いずれにしても、命というものを非常に大切にしている文化だということがわかってきました。

もうひとつは国宝になった中空土偶です。1989年(平成元年)に最初に南茅部に来た時に土偶を見せてもらったんですが、「すごい技術があるんだな」と感心しました。最初は縄文の大規模な土木技術とか漆などの工芸技術に感心していましたが、発掘調査の経験を重ねることによって、縄文文化が持っている精神性、例えば「全ての生きとし生けるものを尊重する」という考え方などがこれからの社会でとても重要だということに気がつきました。また、気がついた人間がその価値を発信していく責任があると思いました。ただ、理屈で説明するのではなく、音楽や芸術、観光やイベントなどで楽しみながら縄文に触れることによって、少しずつ縄文の大切さが広まっていくことが理想ですよね。

茂呂剛伸　東京国立博物館で足形の粘土板を見た時に、命の弔い方、家族への愛は今と全く変わらないというところにとても親近感が持てました。縄文人は日本人の祖先なんだと言えることに近づいたのがうれしくて、気づいた者が発信すべき責任があるという先生の言葉はまさにそういうことですね。

阿部　自然や命の大切さ、あるいは尊厳を見直そうという運動は、産業革命以降にウィリアム・モリスらが中心となったアーツアンドクラフト運動やアール・ヌーボーなどのように芸術の世界には広まりましたが、ブームで終わっちゃったんですよね。縄文文化をみても、三内丸山遺跡が脚光を浴びたのはバブルが崩壊した頃で、これから価値観を変えていかなきゃならない時期に注目が集まっています。ですから、これは単なるブームで終わらせないで今度はしっかり社会のなかに根付かせていくのが私たちの役割と思っています。

茂呂　社会に寝付かせる環境づくりの中で私達が縄文文化に誇りを持って発信することが大事だと思います。そこで縄文太鼓を通じて表現としてお役に立てることはないかという発想で日々活動させていただいていますが、世界遺産になった後、どんな活動が北海道と北東北で求められるのでしょうか。

阿部　最初に縄文の価値に気がついたのは岡本太郎さんです。感性の役割は大きい

あべ・ちはる … 北海道各地の縄文遺跡の発掘・研究に携わり、現在「北海道・北東北の縄文遺跡群」を構成する各地の人々とともに、世界文化遺産登録に向けた実務の最前線で活動を続ける

と思います。それと、守っていく人たちが無償のボランティアでというのはなかなか難しいので、活動資金ができるようなビジネスモデルを作っていかなければならないですね。例えば土器作りに参加費をもらったり、ガイドを有料化したりという仕組みを作っていく、その理解を広めていくことも必要と思っています。

茂呂　おっしゃる通りですね。私は世界遺産候補の全ての遺跡を廻りましたが、現地に行った時に整備に温度差、予算の差を感じました。

阿部　ヨーロッパ、特にイギリスでは芸術や食などいろいろな部門のガイドが国家資格になっていて中身の深い観光ができる。遺跡も見ただけではなかなかわからないので解説をして、遺跡や遺物の背景にある縄文の心を伝えるためのガイドも育成していく必要があります。

北海道には年間5,400万人を越える観光客が来ていますが、そのほとんどは縄文に関心のない人です。でも今はアドベンチャー・トラベルが広まっていて、欧米からのインバウンドの35%くらいが参加しているようです。アドベンチャー・トラベルとは異文化、自然、体験の3つのうちの2つの要素を持っているもので、ガイドやインストラクターも必要になってくるので、新たな観光の形態が出来るのではないかと期待しています。こうした観光を北海道で積極的に取り入れ、世界遺産を目指す各縄文遺跡にも広めて行きたいですね。

茂呂　北海道で縄文文化を広めて縄文に興味を持った観光客が日本中の縄文遺跡に行ってみるという横の連携が取れたらいいですね。

阿部　観光を通して、自然や命を大切にという縄文の持っている価値を世界に伝わっていくというのが理想的ですよね。

茂呂　例えば海外の人に「縄文の魅力はなんですか?」と言われた時にどう答えていけばより伝わりますか。

阿部　最初は縄文土器のデザインがかっこいいとか、感覚的に入っていくのもいいと思います。また体験講座も大事だと思っています。例えば、土器作りで縄目を転がしながら、なぜこんな紋様なのかなと疑問に思ったり、そこでインストラクターが教えたりする交流のなかで関心を持ってもらったら、縄文の魅力に気がつくのではないでしょうか。

茂呂　今、縄文太鼓製作教室をやらせて頂いており、子どもたちも大人も手で感じるってすごく面白いと、夢中になってくれます。縄文を学ぶこととは未来が変わることなのかもしれないというところも私は魅力的と思っています。開発が進んでいた時代は遺物もたくさん出てきていますが、私はいろいろなものがもっと見つかってほしいなって思うんです。その可能性って今現在においてはなかなか難しいんですか。

阿部　これからも貴重なものが発掘される可能性はあります。ただマスコミなどでは「最古」ということに関心が行きがちですが、考古学としては「最古」よりもそのモノの流れがわかることに価値があるんです。

縄文時代も、これからも「多様性」が文化を作る

・・・教科書の上では一つにまとめられがちな縄文時代ですが、やはりそれぞれの土地にそれぞれの縄文時代、縄文文化があったのだと思います。北海道・北東北のつながりからそれが見えてきている今、これからの私たちに投げかけているものは何だとお考えですか。

阿部　漆工技術は縄文時代からあるのですが、赤色と黒色を用います。赤は血の色で「生の象徴」。黒は死ぬと血は固まりますから「死の象徴」で、それがひとつにまとまっている。生と死があって命という感覚がある。ヒスイも縄文時代の代表的な装飾品ですが、母岩は白色でそこに緑色の鉱物が入るのですが、それは雪の中から若草が出てくるというイメージだと思うんです。仏教で「依生不二(えしょうふに)」と言うように、一見違うと思っているものが実は一体なんだという価値観が縄文時代にあったのだと思います。それは多様性の原点でもあります。縄文の持つ二つの価値とは、すべての命を大切にすることと、多様性を当たり前のものとして、私もあなたも同じと捉えるということ。この二つの考え方は現在の国際社会の問題を解決する大事なキーワードにもなると思います。

茂呂　東北であなたを「な」、自分を「わ」と言うのを聞いて、「な」と「わ」で"縄文"になる!という話を聞いて(笑)、それが大好きなんですよね。

阿部　それは真髄をついていると思います。

茂呂　他者への攻撃ってシンプルな発想なんですね。相手を殺めるための武器が縄文遺跡から見つからなかったのは、対峙しながらも適正な時間をかけることで戦わずに離れて、時間が解決する…そういうバランスを持っていたのではないかと発想するだけで豊かになれます。

阿部　アイヌ文化にある「チャシ」というのは、そういう議論(チャランケ)をする場所とも言われています。

茂呂　今でいう北海道の中ではアイヌ文化も10くらいのコミュニティがあるようですが、縄文時代もやはりそうした文化圏があったんでしょう。

阿部　複数の小さなグループが共通の精神文化でつながっているのが縄文の強さであり、だから一万年続いたのであって、それがひとつの巨大な文化圏だったら続かなかったかもしれません。文化圏を結びつけるのが漆やヒスイなどの交易です。経済的な理由ではなくモノを回すことで文化圏やネットワークを維持したのでしょう。

茂呂　例えば現在、縄文文化を発信している地域の学芸員、ボランティアの方が縄文文化の魅力を伝え、そうして地域の子どもたちが作って叩く…というふうに幅広い世代が縄文文化を発信できたらと考えています。地域おこしで"自分で楽器を創って演奏する"というのは今まであまりなかったような気がします。縄文土器は自分の故郷の土で作れるのがとても魅力的だと思っています。

近い未来、フランスで縄文太鼓教室ができればと思います。縄文のカルチャー、アートをきっとフランスは求めているのに、今はまだ発信が間に合っていないと思っています。シャンゼリゼ通りで縄文が流行ったら、次は銀座で…となったらいいですよね。ファッション界でも三宅一生さんがいち早く縄文を取り入れたり、先行している方は気づいて動いています。私も表現者としてもっともっと発信していきます。今はまだ、故郷の郷土資料館に行った若者は「縄文って、ちょっとかっこ悪いかな、お勉強だな」と思っていたものが世界のファッションのトレンドになっていたり、ポップカルチャーになっていたり…といったかたちでも発信していきたいと思います。

阿部　私も地元で「南茅部という町は、これから世界のために必要なメッセージを持った縄文文化のメッカなんだよ」ということを、子どもたちにずっと語ってきました。自分が生まれ育った土地に、かつてこれだけの文化があったんだということを実感し誇りに思う、それがまちづくりの基礎となっていく、そういうことをやっていきたいですね。

茂呂　私は札幌大学名誉教授で詩人の原

子修先生にご指導頂き、最初に縄文に出会った時、これは世界に誇れるぞと確信しました。

みんなの「縄文愛」とともに世界遺産登録実現へ

・・・お二方がとてもいい表情で語られる「縄文愛」がこれからの縄文遺産の世界遺産登録、そしてその先につながる原動力になると思います。今、そしてこれから取り組みたいことは何でしょうか。

阿部　今は世界遺産登録の実務で走り回っています。でも、登録はあくまでも手段です。そこから何をしていくかが重要です。登録になったら、縄文文化の精神性、自然観、多様性の重要性を広めていく活動をやっていきたい。その一つの手法として、ユネスコ活動の中にある"ESD"(持続可能な発展のための教育活動)で縄文文化を生かしていきたいと思っています。
イギリスの歴史学者アーノルド・ジョゼフ・トインビーは日本文化を「第三の文明」と言ったし、フランスの文化相を務めたアンドレ・マルローも「日本はアジアの中にありながら独自の文化を持っている」と言いました。海外の人の方が日本文化の価値を感じている。でも日本人はその中にいるから当たり前と思っている。その価値を縄文を通して発見していく、それは自分を発見していくことにもつながります。

茂呂　クロード・レヴィ=ストロースも縄文文化に独創性を捉えましたし、岡本太郎さんに民俗学を教えたマルセル・モースも、だからこそ解ったんでしょうね。
日本は世界で最も考古学者が多いと聞いています。その中で研究というのは十分に尽くされているのでしょうか。

阿部　日本には、開発行為がある場合は原因者負担で埋蔵文化財の調査をするという仕組みがあります。これは世界になかなか例がないので、そういう意味で日本は恵まれています。ですから多くの市町には埋蔵文化財の担当者がいます。一方で、発掘調査と報告書づくりに追われ、十分な研究ができない状況もあります。大規模な開発が全国的に減少してきた今、発掘調査から普及事業にうまくシフトしていけば、縄文文化の普及も全国的に広まっていくのではないでしょうか。

茂呂　専門の方が年に一度集まってアップデートされるようなことを一般の人々ももっと知りたいし、それらはどんな魅力があるのか、噛み砕かないとなかなかわからないですよね。でもそれがわかった時に、自分ならこう表現しようとか、ものを書く人であればそこからストーリーができてきたりとか、そういう「普及活動」がとても重要だと思います。

阿部　「布教活動」だね(笑)

茂呂　そうですね(笑)。その為にもコミュニティビジネスにしていかなければならないですよね。

阿部　それと、考古の場合は100、200とデータが集まってようやく全体像が見えてくるので、ぱっと見た目には分かり難いことが多い。新聞ではよく最古の、最大のという表現が出てきますが、その一つ一つも大事ですが、それよりその前後のつながりがわかって初めて一つの事象がわかる。ここが難しい、それを噛み砕いて解説するのが学芸員の役割でもあります。

茂呂　何かの専門家というよりも、常に広く見ていないとわからないんですね。

・・・このようにして得られた成果を広く発信し共有するための仕組みにも、新たな枠組みや方法が求められていくのですね。

阿部　世界遺産や縄文遺跡の活用には、その資産を管理・運営する民間の組織づくりが大切になっていくと思います。各地には既にボランティア団体やNPOなどがありますが、組織は社会をイノベートしていくためのものですから、ニーズに合わせて変わっていかねばなりません。今求められているものに合わせて組織も変わっていくべきではないか、新たに作っていくべきではないかと提案しています。そういう組織づくりが喫緊の課題ですね。

茂呂　縄文の活用、発信の成功事例の共有に関しては一般社団法人を、表現の分野では一般財団法人を作って応援を受け入れる体制を作ったりとか、NPO法人は行政から支援を受けるときには有効ですし、役割によって法人格は変わってきますね。

阿部　そういうことをやっていけるところが成功すると思います。本当は今からやっていかねばなりませんが、世界遺産登録後に向けてそういう組織づくりをしなければならないと思います。

茂呂　縄文を文化として支援したり、あるいはビジネスに活かしたりといった勉強会があっても面白いでしょうし、そして私は是非先生に「縄文ラジオ」をやっていただきたいです！縄文に関する質疑応答に答えていただけたりすると、一歩動けるような気がします。私も自分の表現活動の中で何か全体に少しでも貢献できることがあればと思っていますし、今日のお話を指針にしていければと思います。まずは世界遺産への登録実現がとても重要ですよね。

阿部　世界遺産は一つのタイトルに過ぎませんが、手を挙げた以上、これは絶対に通らなきゃならないですね。

・・・世界遺産登録へ、その先へといういい流れが、今来ていると思います。

阿部　その流れを引き寄せられるかは、私たちの姿勢にかかっています。縄文の大切さに気がついた人は生き生きと活動しています。それ自体が大切なことです。まさに「縄文愛」ですね。

(2018/9/3 北海道庁にて)

『盲目のサロルンカムイ』横浜へ！

2018.10.7 象の鼻テラス（横浜市中区）

昨年9月と今年4月に札幌時計台ホールにて上演し大きな反響を呼んだ舞台『盲目のサロルンカムイ』。物語の舞台・北海道を飛び出し、横浜での公演を実現することができました。開港の歴史を留める「象の鼻テラス」にしつらえたステージで、札幌公演でも特にご好評をいただいた「画家の青年の真夜中」を演じました。
“どのカテゴライズにも分類されない舞台を創りたい”という思いからスタートした本作は、ダンサー・作曲家・画家・脚本家・プロデューサー・声優・映像作家・翻訳家・太鼓演奏家などのクリエイターそれぞれが自身の美を提示して創り上げた舞台です。自然の脅威に北海道が揺れるなか、縄文文化から続縄文文化、そしてアイヌ文化から現代へ、自然への畏敬の念を忘れない北海道に暮らす私たちの風土の美をお届けすることができました。今後もさまざまな地にお伺いし、演じていくことができればと思っております。

渋谷のど真ん中で縄文ビート最高潮!!

YATSUI FESTIVAL 2018

2018.6.17 O-EAST（東京都渋谷区）

お笑いコンビの「エレキコミック」のメンバーにして大の音楽好きであるやついいちろうさんが主催するライブフェスティバルに初出演しました。7年目の今年はなんと323組が出演。ロック・アイドル・DJからお笑い・トークまで多彩なライブが2日間繰り広げられる中、茂呂率いる縄文太鼓隊が北海道直送のビートを打ち鳴らし、会場を熱狂の渦に巻き込みました。東京国立博物館の「縄文展」など東京でも縄文ムーブメントが巻き起こる中、時を超えたライブカルチャーの力を演者とオーディエンスが共有しました。

『縄文zine』×BEAMS「TATEANA展」

買って帰れる
BEAMSに縄文太鼓が登場!

2018.10.30〜11.11
BEAMS TOKYO（東京都新宿区）

縄文を今に生きるカルチャーとして発信しているフリーペーパー『縄文zine』。茂呂も度々登場させていただいている同誌がセレクトショップ・BEAMSとイベントをプロデュース。東京・新宿の"BEAMS TOKYO"に縄文太鼓が並び、販売されました。縄文文化をさまざまに取り入れたグッズとともに並ぶのは、茂呂と門下メンバーが精魂込めて作った縄文太鼓の数々。金雲母を贅沢に散りばめた豪華版から手に乗るサイズのものまで、多彩な大きさとデザインを取り揃えました。叩けばそこに太古の風が吹く・・・縄文太鼓の豊かで深い世界への入口を、私たちはいろいろなところに広げています。

秋の札幌にジャンベの熱風が吹いた
Contemporary Djembe Festival 2018

2018.11.3 ザ・ルーテルホール（札幌市中央区）

西アフリカ発祥の民族楽器・ジャンベを"コミュニケーションツール"として現代社会に一層普及させていくことを目的に、6回目を迎えた恒例のイベント。
コンクールではジャンベを打つ姿、そして放つ音で自らを表現し、熱演を繰り広げました。また、これまでの歴代チャンピオン同士によるエキシビションや、交流を続けている鹿児島県奄美群島の三島村から「みしまジャンベスクール」校長を務める徳田健一郎さんが駆けつけてくださり、茂呂とのセッションをお楽しみいただきました。
なお、コンクールのソロ部門は川村怜子さんが、ユニット部門は「BO」（高松瑞恵さん・稲垣早希さん）が優勝の栄冠を手にされました。
ジャンベを通じ、地域を越えた人と人、音と音の交流の機会を今年も作ることができました。

information

後援会からのお知らせ
最新の情報は茂呂剛伸Webサイト・Facebookをご覧ください

今年も大晦日～年越しは札幌時計台で!
時計台ジルベスターコンサート2018-2019 開催決定

おかげさまで恒例となった「時計台ジルベスターコンサート」。
昨年も大晦日から今年の元日にかけてたくさんの皆さまのご来場を賜りました。創建140年を機に改修工事を終え装いを新たにした札幌時計台にて、今年の大晦日も開催させていただくこととなりました。
『盲目のサロルンカムイ』の再演を実現するなど、私たちとのご縁も重ねてきたこの場所で、平成最後の年越しとして、ゆく年を送り、来る年を寿ぐ時間を、また皆さまとご一緒できれば幸いです。
●12月31日 公演時間・回数及び出演者ラインナップは決まり次第お知らせいたします
●会場…札幌時計台ホール(札幌市中央区北1条西2丁目 札幌時計台2階)

■Webサイト…http://www.goshinmoro.com/
■Facebook…https://www.facebook.com/goshin.moro ([茂呂 剛伸]で検索)

編集後記

本号インタビューでご登場いただいた阿部千春さんのお話にもありましたが、そのものの価値を、それに気がついた人が発信していくことの大切さの積み重ねの上に、北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録も、そして縄文文化の更なる隆盛も形になると改めて思っております。6・7ページで東京や横浜での活動をご紹介いたしましたが、これをより全国、世界へと広げていくべく精進してまいります。
今後も茂呂剛伸と門下メンバーの活動、親交のある方々との対談などを通じてより充実した内容をお届けしてまいりますので、よろしくご愛読のほどお願いいたします。
■vol.09…2019年4月発行予定　＊内容・発行日は変更となる場合がございます
＊バックナンバー(vol.01～07)ならびに英語版(vol.01～03抜粋)・フランス語版(vol.01・03合併号／vol.02)をご希望の方は、事務局までお問い合わせください

茂呂剛伸後援会 ご入会のお誘い

縄文の響きを未来へ…そんな思いをより多くの人々に伝えていく茂呂剛伸の活動をより近くで支えていただけるよう2015年4月に発足し、今年で4年目を迎えたのが「茂呂剛伸後援会」です。
本会報のお届けやイベントへのご案内、チケットの優先販売等の会員特典がございますので、是非ご入会いただきますようお願い申し上げます。
【入会のお問い合わせ】FAX 011-200-2113・メール moro-t@mirai-t.com ＊茂呂剛伸後援会ご入会の旨、タイトルにお書き添えください

Goshin Moro
Supporters Club
News Letter
茂呂剛伸後援会 会報 第8号
2018年11月15日発行

発行者　茂呂剛伸後援会事務局
発行所　茂呂剛伸後援会
064-0804
札幌市中央区南4条西1丁目15-2 栗林ビル7階
株式会社オフィスモロ 内
デザイン ウリュウ ユウキ(クリエイティブワークス19761012)

TEL 011-200-2112
FAX 011-200-2113
moro-t@mirai-t.com
www.goshinmoro.com